

5 種の説明

魚類の特徴の記述については、主に山と溪谷社(1989)『日本の淡水魚』を参考にしました。また、甲殻類は誠文堂新光社(2014)『日本の淡水性エビ・カニ』を参考にしました。そして、小原(2019)も参考にしました。貝類の特ちょうについては、主に日本ベントス学会編(2012)『干潟の絶滅危惧動物図鑑』やピースーズ(2003, 2004)『日本産淡水貝類図鑑①②』、南方新社(2003)『貝の図鑑 採集と標本の作り方』、誠文堂新光社(2019)『日本の貝 629 種』をもとに書きました。また、それ以外では、ホームページや父の作成した資料をもとに書きました。

図鑑に載っていない種については、深川(2021)、父が作成した資料(2002、2013、2019)や、『日淡会 HP』を参考にしました。その他、父から教えてもらったことも説明の中に入れていきます。そして、実際に捕まえて飼育したり、観察したりして気づいたことや分かったことなども書き加えています。

採集した全種類を説明することは難しいので、種類を絞って説明します。

○ウナギ(ウナギ科)



全長100cm。調査中10~20 cmの個体をよく見かけます。重用食料魚で絶滅危惧種(環境省 VU)です。長崎県内では20cmより小さい個体は採集禁止になっています。

○アユ(キュウリウオ科)



全長10~30cm「清流の女王」と呼ばれる魚です。対馬では中規模河川で、長崎でも多くの河川で本種を見かけます。両側回遊性の年魚で、秋に下流域で産卵前の大型の個体が見られます。

○カワムツ(コイ科)



全長15cmです。カワムツは、対馬にはいないが長崎県内のどの河川でもたくさんいます。大きい個体は流れのあるところにいますが、小さい個体は流れのないところに見られます普通種です。以前カワムツB型と言われていたものです。

○オイカワ(コイ科)



全長15cmです。カワムツと同じく対馬にはいません。アユを放流している河川の中流域にいます。県内では国内外来種の可能性が高いです。泳ぐのがとても速い。産卵期になるとオスには、体側に鮮やかな青緑色と赤色があらわれ、熱帯魚に負けない美しさがあると思います。

○ウグイ(コイ科)



全長 30 cmです。本種は、県内では対馬でしか見ることができない珍しい魚です。両側回遊種で、産卵からある程度の大きさまでは淡水域で成長し、大型化すると降海する個体もいます。仁田川や佐須川に多く、10月中旬頃小茂田の港に群れて泳ぐ姿が見られました。

○タカハヤ(コイ科)



全長 10 cmです。長崎では山間部に見られます溪流型の「ハヤ」の一種です。「アブラメ」ともいうそうです。細長い魚で不明瞭な一本のうす茶の縦線がある。対馬では上流から河口近くまで本種が見られることが珍しくないです。長崎市では珍しい魚です(市 NT)。

○ムギツク(コイ科)



全長 15 cmです。細長い魚で一本の黒い縦線があります。川の中・下流域や用水路に生息します。川の淵に多く、川棚川や彼杵川では、カワムツに紛れて泳いでるのを見かけました。県の絶滅危惧種です(県 NT)。



○カマツカ(コイ科)

全長 20 cmです。カマツカは、砂礫底の瀬にいます。餌をとるときは少しずつ前進して砂と共に餌を吸い込みます。雑食性で、幼魚は藻類を食べるそうです。県の絶滅危惧種です(県 NT)。



○イトモロコ(コイ科)

全長 8 cmです。体は太短く眼が大きいです。下流域や灌漑用水路の流れがゆるやかな砂底に多いです。絶滅危惧種(県 EN)に指定されていて、長崎県では捕獲禁止の魚です。



○タモロコ(コイ科)

全長 8 cmです。体は太短く眼が大きいです。下流域や灌漑用水路の流れがゆるやかな場所を好みます。福江島の鰐川中流で見かけました。



○コイ(コイ科)

全長 60 cmくらいの大きな魚です。よく、対馬の川や長崎の川にもいます。自然分布ではないだろうと父が言っていました。ニシキゴイはもちろんマゴイも誰かが放流したのかと考えています。

○オオキンブナ(コイ科)



全長25cm。県内では、川棚川水系村木川でのみ確認しています。ギンブナによく似ていますが、体色が金色がかっていることや背びれの条数が15本前後でギンブナの17~18本と違いがあるので区別が付きます。その他のフナについては、同定が非常に難しいので「s p種」としています。

○カゼトゲタナゴ(コイ科)



全長 4 cmです。体は他のタナゴ類と同じく、ひし形のような形をしています。背びれに黒い斑や尾筒から体側に伸びる青い線が特徴です。用水路の流れがゆるやかな砂底に多いそうですが、県内では壱岐の幡鉾川中流約 200m区間しかいません。絶滅危惧種(県 CR)に指定されています。

○アブラボテ(コイ科)



全長7cm位です。他のタナゴ類と同じく体は扁平しており、上から見るとハヤのようにも見えます。油のような茶色の体色からこの名が付けました。川棚川に生息しますが、県内では採集禁止種となっています。

○ヤリタナゴ(コイ科)



全長8cmくらいの大きな魚です。県内では諫早の本明川下流及び諫早干拓調整池流入河川で見られます。自然分布ではない魚だろうと父が言っていました。オスは背びれと尾びれに赤い縁取りが見られます。

○ドジョウ(ドジョウ科)



全長オス 11 cmメス12cmです。県内ではずいぶん少なくなり、レッドデータでは環境省・県 NT、長崎市 ENとなっています。県レベルよりも長崎市の方のランクが上なのは、生息地がほとんどないからです。対馬でも佐護棕梨など生息地が少なく、あまり見つかっていない。

○ヤマトシマドジョウ(ドジョウ科)



全長8cm程のドジョウの仲間です。県内ではずいぶん少なくなり、レッドデータでは環境省・県 VU となっています。壱岐の幡鉾川で確認したほか、本明川や郡川、川棚川で見つかるのだそうです。ヤマトシマドジョウはこれからたくさんの種に分かれる可能性があるそうです。

○ナマズ(ナマズ科)



全長 60 cmの大型種です。日本全体にいますとされていますが、対馬にはいません。写真の個体は本明川の水田横の水路です。体色はオリーブ色～黒褐色で、不規則な斑が体全体をおおっています。

○ミナミメダカ(メダカ科)



流れの緩やかな小川や塩性湿地に生息する。対馬では田之浜が有名ですが、豊玉町の田や美津島町箕形の塩性湿地にも多いです。メダカはダツ目で先祖は海に生息していたもの(二次淡水魚)なので、塩分のある場所を好みます。長崎市ではあまり見かけることはありません。絶滅危惧種です(国 VU、県 NT、市 VU)。

○チチブモドキ(ハゼ科)



全長 12 cmです。対馬では、対馬暖流の影響を受けています河川下流に生息します。チチブモドキは、体形だけではなく体色変化もカワアナゴと似ていますそうです(小原:2019)。主に汽水域から淡水域の下流部で、底質が泥底を好む。生息域拡大中です。

○ドンコ (ハゼ科)



全長最大 25 cmです。ドンコは神浦川・式見川など五島灘沿岸河川や対馬にはいません。上流域下部から中流域の淵を中心に生息しています。動物食で、しかも生きた餌しか食べません。郡川や本明川、川棚川などにはたくさんいます。

○アベハゼ (ハゼ科)



3cm程度の小型のハゼです。汽水域のどぶ臭い水たまりや干潟の流れの少ない

場所に多くいます。尾びれの付け根に2本の縦縞が入るのが特徴です。五島にはイズミハゼとの中間型がいるそうです(写真右)。普通種です。

○ヒナハゼ (ハゼ科)



1cmほどの小型のハゼです。下流～河口付近の緩やかな流れに積もった落ち葉や流木の下で見つかることがあります。体側の黒斑が市松模様のような配列になっています。普通種です。

○クロコハゼ(ハゼ科)



5cm程のハゼで、河口付近の転石の下に多いことが多くです。南方系のハゼで、以前は県内でも見つかることは少なかったようですが、地球温暖化に伴い、やや増加傾向にあるようです。最新版のレッドリストでは絶滅危惧種から外されています。

○ヒモハゼ(ハゼ科)



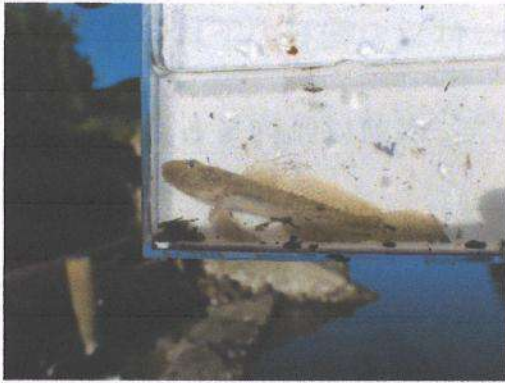
5cm程の細長いハゼです。体側に暗色縦条が入る。軟泥質干潟を好み、同所的にタビラクチやスジハゼといった魚が見つかることもあります。細いので、網の目から逃げてしまい、捕まえるのが難しい。絶滅危惧種です(環境省・県 NT)。

○ツマグロスジハゼ(ハゼ科)



7cm程のハゼです。体側に青い斑点が入るので美しいハゼです。軟泥質の干潟に生息し、テッポウエビとの共生で有名です。以前はスジハゼA型と呼ばれており、腹びれの先端が黒く細長い斑があるのが特徴です。B型は腹びれに黒い斑はありません。どちらかと言えば、A型の方が多産するようです。

○アシシロハゼ (ハゼ科)



マハゼの仲間で、体長10cm程の中型のハゼです。河川の緩やかな流れのある砂泥底に生息します。雄の体側には白い横縞が数本入るのでわかりやすい。普通種です。

○マハゼ (ハゼ科)



マハゼの仲間で、体長10cm程の中型のハゼです。河川の緩やかな流れのある砂泥底に生息します。ハゼ釣りの本命で、天ぷらにすると美味しいのだそうです。普通種です。

○ゴクラクハゼ (ハゼ科)



ヨシノボリ属の中で、もっとも下流域(河口にもいます)にすむ両側回遊種です。体側に5~6つの暗い色のもようが現れます。目から口先までの長さが長く、目のすぐ後ろにまでうろこが入るので、他のヨシノボリ属の魚と区別がつけられます。オスの大型個体は背びれに赤と黄色のラインが入ってきれいです。

○シマヨシノボリ(ハゼ科)



本属の中では最も多くの地点で見られる魚です。河川中流域の早瀬や流れの速い平瀬の岩の下で見られます。頬にミミズ状の模様や、胸びれ付け根に三日月状の模様が2本入ります。繁殖期のメスの腹部は青く発色してきれいです。

○クロヨシノボリ(ハゼ科)



シーボルトが西洋に知らせたヨシノボリ属の基本種です。どちらかというと細い流れの川を好み、シマヨシノボリよりも若干上流部に生息します。オスの婚姻色は非常に美しく、尾びれは赤い矢じり模様が羅列します。また体側に破線が入り、尾びれ基底部に漢字の「八」の模様が入るのが特徴です。

○トウヨシノボリ(ハゼ科)



トウヨシノボリはヨシノボリ属の中で、体色や斑紋が大きく変異している種類で、個体差があるので、共通の特徴を持ったのは、見つけにくいようです。琉球列島を除く全国の淡水湖と汽水湖およびその流入河川に生息する(1189:川那部浩哉、水野信彦)とされて

いましたが、湖沼にいるものはシマヒレヨシノボリと別種となりました。尾びれ基部が橙色ですが、これも個体差や地域差があります。

○カワヨシノボリ(ハゼ科)



長崎県では、福江の鰐川と、川棚川・彼杵川にしかいません。ですが、鰐川のカワヨシノボリ(左側)と川棚川、彼杵川のカワヨシノボリ(右側)では違う型のように、新種記載の可能性があるのでそうです。シマヨシノボリと同じ早瀬にいます。

○ビリンゴ(ハゼ科)



河川の河口付近、砂泥～砂礫底の干潟に生息する5cm程のハゼです。澤筋に群れていますことが多い。県では普通種ですが、砂泥の環境の少ない長崎市ではレッドリストに入っています(市 NT)。

○スミウキゴリ(ハゼ科)



河川の下流域の淵やヨシの根元に生息する全長15 cm程の魚です。県内では、ウキゴリ属の中では最も確認地点が多い魚です。ウキゴリとは浮くゴリ(ハゼの総称)からきています。

○クボハゼ(ハゼ科)



河口付近の砂泥質干潟でスナモグリやアナジャコの巣穴で生活するハゼです。体型がサンショウウオの幼体に似ていて、体側に暗色横帯が5本ほど入る。環境省ではENに指定されています。全国的にはかなり厳しい状況だそうです。

○チチブ(ハゼ科)



体が黒っぽいハゼです。第1背びれが糸状にのびるので、ヌマチチブとの違いもわかりやすいようです。河口付近の流れのある転石帯に生息する。生息分布域が広く、県内の多くの河川で確認できました。

○ヌマチチブ(ハゼ科)



チチブそっくりな魚です。第1背びれの糸状の背びれがチチブより短く、頬の白斑が小さめで、安静時はやや青色を帯びるのが特徴です。なお、明仁上皇さまが本種を分類する論文を出したことは有名です。1年生の時に、この魚を自由研究のテーマにして調べました。

○トビハゼ(ハゼ科)



全長10cmのハゼです。長崎県では、有明海に注ぐ河川や佐々川、江迎川に生息する。父によると、長崎市の多以良川にいたそうですが、今はもういません。主に空気呼吸を行い、皮膚がこの場合の主要な呼吸器官になるのだそうです(川那部浩哉、水野信彦:1989)。

○ミミズハゼ(ハゼ科)



全長8cmのハゼの仲間です。体は円形の細長い魚です。川の汽水域や下流域から淡水がしみ出す海岸に生息しています。石と石の間や石の下にひそみ、ゴカイ類を食べるそうです。

○イドミミズハゼ (ハゼ科)



全長7cm程のオレンジ色のハゼです。河川河口付近の転石帯の淡水の浸み出しがあるような場所にいます。魚なのに網を使わずに捕まえる魚で、捕るのがとても難しいです。そのため、熱狂的な飼育マニアが高値で取引をしていたこともあったそうです。今は絶滅危惧種(国・県 NT)に指定され、長崎県の条例で採集禁止となっています。

○カジカ (カジカ科)



河川上流部に生息するハゼに似た魚です。県内では、多良山系の有明海側のいくつかの河川に生息しているそうです。大村市においては郡川の黒木河川公園のみで確認されています(小原:2013)。非常にめずらしい魚で、絶滅危惧種に指定されています(国 EN・県 VU)。

○クサフグ



全長15cmです。クサフグは、日本の沿岸に広く分布しています。海産魚ですが低塩分にも強く、汽水域から下流域にまで侵入します。どの海域の河川河口付近で確認できました。

○ヤマトヌマエビ(ヌマエビ科)



熱帯魚と一緒に売られていることが多い本種ですが、対馬では瀬川で1個体だけ確認できました。対馬暖流の影響が強い五島灘沿岸地域の上流部で見られ、杉谷川・相川川で多く見られます。対馬では超レアで、3年間で1個体のみ捕まえました。県 NT となっています。

○ミゾレヌマエビ(ヌマエビ科)



県内ではほぼどの河川でも見られるヌマエビです。両側回遊種で、卵からふ化した幼生は海に下る。下流付近の水草を探せば、本種が見つかることが多いです。メスはヌマエビ(対馬のみ生息する)によく似ています。

○ヒメヌマエビ(ヌマエビ科)



本種は、対馬で見られるヌマエビ科のエビで最も小型です。濃い褐色に正中線に薄い黄土色の線が入るものや、ビーシュリンプのような横じまの個体も見られます。主に五島灘沿岸の河川に生息します。下対馬では、南西側の久和川で見られました。県 NT となっています。

○トゲナシヌマエビ(ヌマエビ科)



本種は対馬暖流の影響を強く受ける地域で見られ、五島灘沿岸の河川では上流～中流域で多く見かけます。額角がとても短いのが特徴です。歩行能力がとても高く、捕まっても網からすぐに逃げだそうとします。

○カワリヌマエビ科 sp (ヌマエビ科)



河川の下流域から中流域ため池に生息する。水草を探せば、たくさん見つかります。陸封種で、水槽内で繁殖させることもできます。小型個体は、幅が狭く、成長と共に幅が広くなるそうです。一般的にミナミヌマエビとされてきましたが、複数の亜種があり、分類が難しいのでsp種としました。

○ヌマエビ(ヌマエビ科)



県内では対馬しか見られないヌマエビです。ヌマエビ科としては大型で雌個体は5cm程になります。五島灘沿岸の河川に多いヤマトヌマエビに似た形をしていますが、尾びれの青斑が本種にないので区別が付きやすいです。河川の下流部の淵から上流部の細流でも見つかります。

○テナガエビ(テナガエビ科)



本種は下流から河口域にかけて生息する普通種ですが、見る機会はミナミテナガエビと比べて多くはありません。県内で見られる3種のテナガエビの中で最も爪が長くなる特徴があります。

○ミナミテナガエビ(テナガエビ科)



「ダクマ」と呼ばれるエビです。下流から中流にかけての瀬に見られます。ヒラテテナガエビと生息域は重なることもありますが、どちらかといえば下流側にいます。県内では東シナ海沿岸地域に多いですが、対馬はあまり多くありません。県 NT となっています。

○ヒラテテナガエビ(テナガエビ科)



やや上流部分に棲むテナガエビです。ザリガニほどはないものの太くて長い第2胸脚が特徴です。頭部側面に雄雌両方とも3本の縦線が入るので、テナガエビの仲間では見分けが付きやすいです。

○スジエビ A 型 (テナガエビ科)



釣り餌用としても流通しているスジエビ A 型 (陸封型) は池や河川中流部に生息しています。地域間で生殖しにくく、遺伝的に地域で地方品種レベルの違いがあるのだそうです。

○スジエビ B 型 (テナガエビ科)



スジエビの中で両側回遊する型が B 型です。A 型よりも大型化し、明瞭な黒い横線模様があります。主な生息環境は汽水域の構造物や植物の根のあたりです。B 型の存在はあまり知られておらず、県内では対馬の西海岸だけの分布となっています (県 VU)。私も 1 回しか捕まえたことがありません。

○ユビナガスジエビ (テナガエビ科)



下流域から塩分濃度が薄い内湾の浅いところの水草や構造物に生息しています。個体ごとに色が違い、雌はオリーブ色ようになります。スジエビモドキと生息域が重なりますが、より淡水の影響が強い場所で見つかることが多いようです。普通種です。

○スジエビモドキ(テナガエビ科)



ユビナガスジエビと同所で見つかることが多いですが、より海側に生息しています。腹部基底部や第4腹節の縁に黒い線が入るので区別ができます。普通種です。写真の個体は線が濃く現れているタイプです。

○テッポウエビ(テッポウエビ科)



河口干潟の砂泥底に生えるアマモやコアマモの藻場に生息するエビです。スジハゼ類との共生で有名で、巣穴をつくる代わりにスジハゼに周囲の警戒をしてもらうそうです。狩りをするとき、ハサミを閉じる衝撃波を利用しています。

○テッポウエビsp(テッポウエビ科)



テッポウエビ科のエビには本土で30種以上いるとされています。県内各地で行った調査でも数種見つけておりますが、同定するのが専門家でも難しいとのことですので、sp種としました。

○ハサミシャコエビ (ハサミシャコエビ科)



アナジャコ類に似ていますが、ハサミが大きく、アナジャコよりも尾部がスマートです。黄色みがかった白い甲をまとっています。豊玉町佐保の干潟で多産します。県 (NT) に指定されています。

○アナジャコ sp (アナジャコ科)



河口干潟の砂礫底に巣穴を掘ってそこで生活しています。スジハゼ類やクボハゼと共生することもあるそうです。アナジャコ科の分類は難しく、アナジャコ sp とした。今後、詳しく調べる必要があります (ヨコヤアナジャコは県 NT に指定されています)。

○サワガニ (サワガニ科)



河川の上・中流域やその周辺の湿地帯の石の下や巣穴をほって生息します。雄の手の片方は大きく成長します。本土ではどこの川の上流でも見つかるイメージがありますが、対馬には生息しません。陸封種です。

○アカテガニ(ベンケイガニ科)



河川下流部の斜面の土手に巣穴をつくって生息しています。意外に標高の高い場所でも見られます。ベンケイガニによく似ていますが、眼後棘は1対のみで、2対あるベンケイガニとは区別がつけます。また、甲羅の下の方がくびれている感じなのも違いの1つです。

○クロベンケイガニ(ベンケイガニ科)



河口付近や汽水域に多いカニです。泥っぼい所に穴をあけて巣を作ります。カクベンケイガニやフタバカクガニよりは上方で、アカテガニよりは下方で見つかることが多いです。体が灰色で、腕が紫色となっています。大きい個体にはさまれるととても痛いです。普通種です。

○ベンケイガニ(ベンケイガニ科)



アカテガニによく似た種で、一見間違えやすいです。目と目の間に切れ込みや、眼後棘が2対あること、甲羅の左右両下部がアカテガニに比べ張り出すことで区別がつけます。甲羅やはさみの色はオレンジ色になるところからも特徴です。

○ユビアカベンケイガニ(ベンケイガニ科)



甲幅2cm程の小型のカニです。アカテガニの若い個体と雰囲気似ていますが、アカテガニのはさみの先が白いのに対し、本種は赤いので区別がつけます。満潮線より上方の転石帯、ハマボウ・シバナ群落、堆積物の下などに生息しています。県 NT に指定されています。

○ウモレベンケイガニ(ベンケイガニ科)



甲幅2cm程、甲羅表面に凹凸がある。満潮線よりも上方の転石帯に生息し、ユビアカベンケイガニと生息地が重なっています。石をめくると見つかり、すぐに死んだふりをするので、本種だと分かります。工事などにより干潟が消失しつつあるので減少傾向が進んでいるようです(県 NT)。

○フタバカクガニ(ベンケイガニ科)



甲幅4cm程の中型種で、ベンケイガニと同じく眼後棘が2つあり、黄土色の体色をしています。河口付近ではどこにでも見られ、石垣や堆積物の下、軟泥質の干潟にも生息します。

○カクベンケイガニ(ベンケイガニ科)



甲幅4cm程の中型のカニです。暗褐色の甲羅に茶色を帯びたはさみを持っています。河口付近の岩場や堤防などで見られる普通種です。フタバカクガニと生息域が重なりますが、本種はより海に近い岩場を好むようです。

○ケフサイソガニ(モクズガニ科)



河川下流部～浅い海ならばどこにでも生息が確認できる種です。雄の腹部には黒い点があり、はさみの可動部付け根に毛が密生します。似ている種にタカノケフサイソガニがいます。普通種です。

○モクズガニ(モクズガニ科)



甲幅10cmほどの比較的大型のカニです。腕に毛が密生しています。「上海ガニ」に近い仲間で、県本土では「ツガネ」・「ツガニ」と呼び、カニ汁にして食べる人いるそうです。減少傾向にあり、県 NT に指定されています。

○カワスナガニ(ムツハアリアケガニ科)



甲幅 1cm 未満の小型のカニです。WWFJ サイエンスレポートでは、「絶滅寸前種」とされていましたが、最近各地で見つかっています。レッドデータでは環境省 NT、県 VU となっています。他地域に比べ大村湾沿岸に多く、対馬でも久和で見られます。汽水域上端部の転石下にじっとしていることが多い。

○クマノミオスジガニ(ムツハアリアケガニ科)



2004年に宮崎県北部の熊野江川で発見され、ムツハアリアケガニ科の新種として記載された汽水性の小型種です(岸野、木邑、唐澤、國里、酒野、野元、和田：2010)。福江島や平戸での発見が続いています。

○チゴイワガニ(スナガニ科)



甲幅 5mm 程の小型のカニです。ムツハアリアケガニによく似ていますが、砂泥～軟泥質干潟を好み、足が長く、足の節に褐色の縞が入るので区別がつけます。県 VU ですが、様々な場所で見つかり、そこまで生息分布状況は危機的ではないようです。

○ヒメヤマトオサガニ (スナガニ科)



河口干潟や船だまり等の軟泥質の泥が堆積していますような所に巣穴をつくって群落をつくります。内湾から外海にできる干潟に生息します。雄は求愛行動としてウェイビングをしますが、万歳をしているように見えるので、学名は *Macrophthalmus banzai* となりました。

県 NT に指定されています。

○チゴガニ (スナガニ科)



河口干潟や船だまりの泥の堆積があるような場所に巣穴をつくって群落をつくる、甲幅約 1 cm 程の小さなカニです。体の腹面がやや青みがかった色をしており、潮が上がる時間帯には集団でウェイビング行動をとります。県 NT に指定されています。

○シオマネキ (スナガニ科)



主に有明海沿岸に生息するカニです。河口干潟やヨシが生えている場所に生息します。県内でも希少なカニで、環境省 VU、県 EN となっています。今里川でウェイビングする姿をたくさん見る事ができました。

○ハクセンシオマネキ(スナガニ科)



干潟の上でよくウェイピングする姿が見られますカニです。県内各地に生息していますが対馬には生息しません。チゴガニと同じような場所に巣穴を作る。長崎市の多比良川、西海市の多比良川両河川でたくさん見つかります。

○マメコブシガニ(コブシガニ科)



砂泥～軟泥質干潟に生息します。甲幅は2cm程度の小型のカニで、甲羅がタマネギのような形をしています。良い干潟があれば必ず見つかるので、環境指標にもなります。私のお気に入りのカニです。

○イシガニ(イシガニ科)



干潟や海底に生息する。甲幅10cm程度の比較的大型のカニです。大村湾では専門の漁師さんがいるくらい人気のあるカニです。とても味が良く、父がよくカニの Pasta にしてくれています。対馬では「イソガニ」と呼んでいますが、本当のイソガニはモクズガニ科です。



○ヒザラガイ(クサズリガイ科)

全長5cmほどの貝です。淡水の影響をあまり受けな
いような岩場で見かけます。うろこのような板状の貝殻
がついています貝です。県内どこの海域にも生息してい
ます。



○ヒメコザラ(コガモガイ科)

全長10mmほどの貝です。河川の河口付近や河口干
潟で見られます。石の裏やカキ殻などに付いていますこ
とが多いです。



○ツボミガイ(コガモガイ科)

殻長は1cm前後の貝です。内湾性の干潟に多く分布
しています。表面が平滑な小石、二枚貝類の死殻表面
などに付着しています。準絶滅危惧に指定されています。



○ヒロクチカノコ(アマオブネ科)

全長20mmほどの貝です。汽水域や河口干潟の転
石や流木、護岸に付着しています。県内では大村湾や
有明海に多く分布しています。絶滅危惧ⅠB類です。



○カノコガイ(アマオブネ科)

全長10mm前後の貝です。二等辺三角形の頂点の部分が、黒くなっていますので、イシマキガイと区別がつきます。外海に多く、有明海などには生息しません。



○イシマキガイ(アマオブネ科)

殻長 15~20mmの貝です。カノコガイと似ていますが、二等辺三角形の底辺の部分が黒くなっていますところがちがいます。カノコガイよりも上方の汽水域・淡水域に生息しています。



○ヒメカノコガイ(アマオブネ科)

全長10mm未満の貝です。河口や、内湾奥部、干潮時に淡水コアマモ場周辺の泥上に棲息しています。大村湾沿岸に生息し、県内では絶滅危惧ⅠAに指定されています。



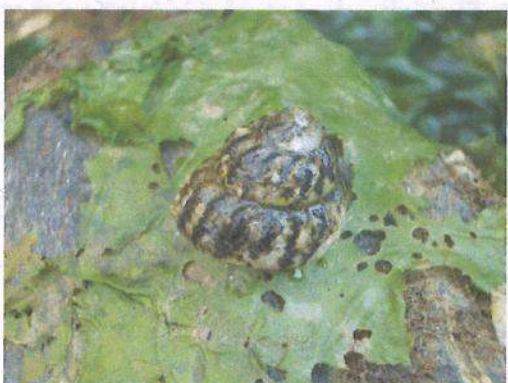
○ミヤコドリ(ユキスズメ科)

全長10mmほどの貝です。河口の潮間帯に生息しています。泥に埋もれた礫や岩、プラスチック製品の廃棄物の下部周辺に付着しています。身が赤色になっていて、特徴がわかりやすいです。県 NT です。



○クボガイ(クボガイ科)

殻長が3cm程の貝です。軟体は白色で、側面は黒色に染まります。斜めに縦肋が並んでいます。縦肋がない個体もまれに現れます。



○コシダカガンガラ(クボガイ科)

殻長3cmほどの貝です。殻色は灰色です。渦巻の付け根の部分に穴が開いています。クボガイやヒメクボガイよりも幅が広いです。



○スガイ(リュウテンサザエ科)

殻長2cm程の貝です。軟体は、黄白色を地色に、黒色の斑模様です。色帯の入る個体も現れることがあります。潮間帯上部の転石下に生息します。



○マルタニシ(タニシ科)

全長40mm前後の貝です。そろばん玉の形をしています。水田や池、水路、流れがゆるやかなところにいます。県 VU に指定されています。



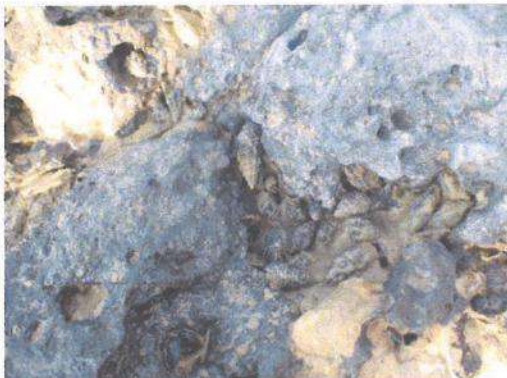
○ヒメタニシ(タニシ科)

全長20mm前後の貝です。殻表は黄土色です。水田や池、水路、流れがゆるやかなところにいます。タニシの中では最も一般的な種です。



○スクミリングガイ(リングガイ科)

全長30mm~40mmくらいの貝です。別名のジャンボタニシが有名です。稲やレンコンなどの農作物を食害することから除去されています。ピンクの卵塊を産むので生息の確認が簡単です。



○カヤノミカニモリ(オニノツノガイ科)

殻長20mmほどの貝です。岩盤上や粗い砂礫底に付着しています。石の隙間や穴のようなところに群れています。絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。



○コゲツノブエ(オニノツノガイ科)

河口付近の泥っばい所に生息します。ウミニナの仲間に似ていますが別の仲間です。大村湾沿岸に多いそうで、どぶ臭い干潟の深場を探せば多数見つかります。県VUに指定されています。

○ウミニナ (ウミニナ科)



全長30mm~35mmほどの貝です。泥の少ない河口や干潟、磯に広く生息しています。潮が引いても、水際に近い場所や、水面下に棲息しています。全国的には減少傾向だそうですが、長崎ではどこにでも見られる普通種です。しかし、県レッドリスト NT に指定されています。

○イボウミニナ (ウミニナ科)



全長40mmほどの貝です。砂泥底の干潟にしかいない貝です。ウミニナよりも低い潮位に棲息しています。本種が好む環境が減ってきているのか、県 EN に指定されています。

○フトヘナタリ (キバウミニナ科)



殻長35~40mmほどの貝です。内湾奥部やヨシなど塩性植物が生えるような高潮帯に生息しています。準絶滅危惧に指定されていますが、健全な環境がある干潟には普通に見られます。



○クロヘナタリ (キバウミニナ科)

全長3cm前後の貝です。有明海奥部の河口汽水域の中、軟泥底に生じた水たまりのようなところにいます。長里川や今里川といった諫早湾の北側で見つかりました。非常に珍しく県 CR です。



○ヘナタリ (キバウミニナ科)

砂泥～柔らかい泥の干潟に生息します。ウミニナと生息域が重なりますが、より深い場所を好むようです。カワアイと同所で見つかることが多いです。殻に黄色い帯状の模様が入ります。県 NT に指定されています。



○カワアイ (キバウミニナ科)

軟泥質の干潟に生息する貝で、赤みがかった焦げ茶色をしています。フトヘナタリやウミニナより深い場所を好みます。ヘナタリと生息域が重なりますが、やや深場を好むようです。県 NT に指定されています。

カワアイやヘナタリによく似たヌノメヘナタリも県内で確認が続いています。



○カワニナ(カワニナ科)

殻長20~50mmほどの貝です。川や水路に棲息する淡水巻貝の代表的存在です。よく石にくっついてたくさん固まっていますところをよく見ます。川棚川でよく似たチリメンカワニナも生息が確認できました。



○タケノコカワニナ(トウガタカワニナ科)

全長4cmのカワニナに似た貝です。河岸周辺の砂泥底に棲息し、日中でも底床上にすることが多いです。表面の色は濃い茶色です。汽水域に分布しています。県CRに指定されています。



○コビトウラズ(タマキビ科)

殻長3mm前後の貝です。タマキビの仲間で、アラレタマキビよりも小さい貝です。つぶれた円錐のような形で、コンクリートの岸壁のへこみのようなところに群落をつくります。



○ヒメウズラタマキビ(タマキビ科)

殻長25mmくらいの貝です。タマキビの仲間です。タマキビよりも丸みではなく普通の貝に似た形をしています。ウズラの羽のような模様をしています。

○カワザンショウsp (カワザンショウ科)



全長1mmくらいの小さな貝です。河口周辺の汽水域やその直上の淡水域、内湾奥部の淡水の影響する海岸に棲息しています。この仲間は分類が非常に難しく、sp 種としました。



○ウスイロオカチグサ (カワザンショウ科)

殻経約2mmの貝です。カワザンショウの仲間は汽水域に生しますが、本種は、純淡水のしみ出している場所で見られます。



○イボニシ (アッキガイ科)

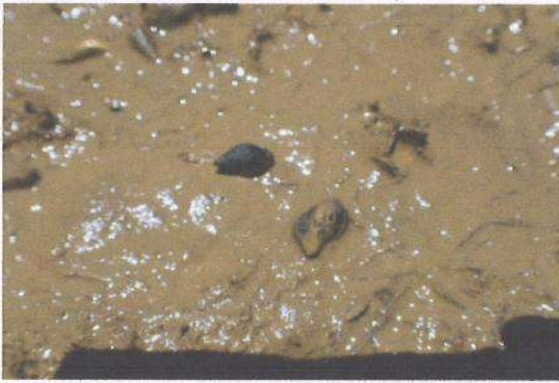
殻長4cmくらいの貝です。汽水域の河口干潟の泥底に住んでいます。二枚貝に穴をあけて体液を吸ったり、肉を食べたりします。吸血鬼のような貝です。近似種にレイシガイなどおり、種類も多いです。

○アラムシロガイ(オリレヨフバイ科)



殻長15mmくらいの貝です。内湾よりも砂泥底や、干潟に群がって生息しています。個体数はとても多く、どこでも見られる貝です。この他、ムシロガイやハナムシロガイなど見つけました。

○カニノテムシロガイ(オリレヨフバイ科)



殻長10mmくらいの貝です。内湾の軟泥質干潟に群がって生息しています。生息地は少なく、小佐々浦など数カ所で見られないそうで、県 CR です。殻口の部分が発達していて、白縁部がカニのはさみのように見えることから名付けられました。

○サカマキガイ(サカマキガイ科)



殻高10mm前後の貝です。回の多くは右巻きですが、本種は左巻きなので、サカマキガイという名前になったと思われます。水田やため池などの人工的な水域に生息しています。



○オカミミガイ(オカミミガイ科)

全長3cm～4cmくらいの貝です。

細長い卵のような形をしています。浸食されて頭の部分が丸い個体が多いです。県 EN に指定されています。長崎県では採取禁止になっています。



○キヌカツギハマシイノミガイ(オカミミガイ科)

殻長7mmの卵型の貝です。茶褐色で縞々の模様が3～6本ある貝です。淡水の影響がある潮上帯のヨシ帯など、海水につからないところに生息しています。この貝は県 CR に指定されています。採集禁止種です。



○ナラビオカミミガイ(オカミミガイ科)

殻長10mm未満の貝です。河口汽水域や内湾奥部海岸の塩性植物の根もとや転石の下で隠れるようにいます。オカミミガイやキヌカツギハマシイノミガイと同所で見られることがあります。長崎県の採集禁止種です。



○シイノミミミガイ(オカミミガイ科)

殻長12mm前後の貝です。河口汽水域や内湾奥部海岸飛沫帯の泥底おい転石が密集した場所や古い石組の奥に隠れるようにいます。多産する謎の県 EN です。



○ドロアワモチ(ドロアワモチ科)

ドロアワモチは、五島・平戸などでよく見つかります。絶滅危惧種ⅠB類に指定されていますが、場所によってはたくさんいます。ぷにぷにされていて、とってもかわいいです。排泄痕を見つけたら本体も見つかります。



○センベイアワモチ(ドロアワモチ科)

ドロアワモチよりも丸くて、かたいです。裏返すと、ドロアワモチよりも白いです。西郷川でしか見つかりませんでした。生息数も少なく県CRに指定されています。



○カリガネエガイ(フネガイ科)

殻長4cm程の貝です。潮間帯から水深20m程までの転石裏に生息しています。殻表には、放射状の細肋が刻まれています。河口付近で普通に見られます。



○クログチ(イガイ科)

全長10mm前後の貝です。河口などの淡水の影響する石礫帯に棲息しています。礫石やマガキなどの隙間などにいます。扇を半分開いたくらいの形をしています。



○ヒバリガイモドキ(イガイ科)

殻長2cm程の貝です。細長く、後端へ幅広く成長していきます。殻色は、黒色で、不規則な成長線が刻まれています。潮間帯の岩礁底に群生して生息しています。



○イシガイ(イシガイ科)

殻長10cm前後の貝です。川の中・下流や水路、湖沼に棲息しています。石に似ていますので石と間違えて見つかりにくいことがあります。県NTに指定されています。タナゴ類が産卵をする貝として有名です。



○マツカサガイ(イシガイ科)

タナゴの仲間が卵を産みつける貝として有名です。この貝がいるということはタナゴ類がいる可能性が高いということになります。神代小路や幡鉾川で見つけました。



○キュウシュウササノハガイ(イシガイ科)

以前はトンガリササノハガイという名前でしたが、最近九州ササノハガイという名前になりました。県絶滅危惧種IA類に指定されています。長崎県内では壱岐にしかいないというとても珍しい貝です。



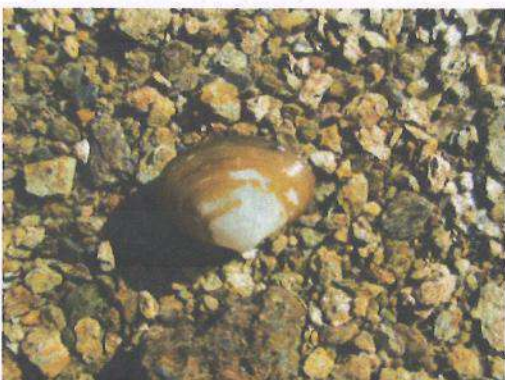
○マシジミsp (シジミ科)

殻長15mm~20mmくらいの貝です。外国産のマシジミが入ってきていますので、マシジミかどうか判断ができないことで「sp種」扱いにしています。



○イセシラガイ (ツキガイ科)

殻長6cm前後の貝です。内湾の中、低潮帯~水深20mの泥底、砂泥底アマモ場などに棲息しています。非常に珍しい貝と言われています。



○クチバガイ (チドリマスオ科)

満潮線付近に生息する貝で、干潟上部に転がっていますところをよく見かけます。対馬では「シジミ」と言って、味噌汁の出汁にする人もいます。ちなみにシジミとは全く違う種類です。県 NT に指定されています。



○シオヤガイ (マルスダレガイ科)

殻長 15~20mmくらいの貝です。温暖な内湾干潟の泥底・泥礫底に生息しています。県 EN に指定されています。大村湾沿岸や佐世保には多いのだそうです。



○ケマンガイ(マルスダレガイ科)

殻長4cm前後の貝です。潮間帯から水深10m程までの砂礫底に生息しています。大村湾にたくさんいます。アサリなどに一緒に見ることが出来ます。県 VU に指定されています。



○イオウハマグリ(マルスダレガイ科)

殻長2cmくらいの貝です。砂泥底に生息しています。殻は円形で膨らみが強く、殻質はやや厚いです。生きている時は殻表に砂や泥を付着させています。県 VU に指定されています。



○カガミガイ(マルスダレガイ科)

殻長は6cmくらいです。殻色は全体が白色で、小月面も白色です。潮間帯以深の細砂底に、広く生息しています。県内各地に生息しており、普通種です。



○ハマグリ(マルスダレガイ科)

25mm前後の貝です。内湾・河口域の中・低潮帯～水深5mの砂底・砂泥底に生息しています。絶滅危惧 I A類に指定されています。手崎川で見つけました。



○オキシジミ (マルスダレガイ科)

アサリと同じように食べられますが、アサリよりも肉が少なく泥臭い感じです。以前は県準絶滅危惧でしたが、改訂で普通種となりました。



○クルマヒラマキガイ (マルスダレガイ科)

殻径 10mm 程度、殻高 mm 程度の扁平な巻貝です。横から見ると殻全体が台形に見えます。ヒラマキガイに似ていますが、螺層の縁がよりとがっていることで区別できるそうです。



○ヒメモノアラガイ (モノアラガイ科)

殻高 5mm 程の小さな巻き貝です。水田や水路に多く生息します。サカマキガイと一見間違えそうですが、殻口は右側にあるので区別が付きます。

他にもたくさんの生き物を捕まえましたが、主だったものを取り上げて説明を書きました。
似たような種も多く、同定がとても難しいものもありました。